

## 因果応報の信念に関する発達的研究

筑波大学心理学系 渡辺 弥生

A Developmental Study of Immanent Justice

Yayoi Watanabe (*Institute of Psychology, University of Tsukuba, Tsukuba 305, Japan*)

This paper reported an attempt to test whether immanent justice responses would decrease with age. Subjects participating in this research were 251 subjects ranging from kindergarten, 2nd, 4th, 6th in the elementary school, to university. They were administered some stories and questions about children who transgressed and then experienced some adversity by means of short vignettes. They were also administered General Anxiety Scale, surveys about superstitious disposition to test the relationship between personality factor and the idea of immanent justice. Results showed that even older children and students used immanent causality to explain the contiguity between the misdeed and the adversity. These data were interpreted as inconsistent with both Piagetian and an information-processing models of immanent justice responses.

Key words : immanent justice, immanent causality, superstitious

### 問 題

「悪いことをすれば、ばちが当たる」といった因果応報の信念は、どのように発達しているのだろうか。Piaget (1932) は、悪事を働いた行為者に災いが生じるという観念を内在的正義 (immanent justice) として、4歳から11歳の子どもの対象に検討した。その結果、他律的道德性の段階にある年少児は、悪事には必然的に罰が伴うという観念をもつものに対して、加齢とともに、罰が人間によって与えられるものとして考えられるようになることや、自然科学的な知識の獲得により、内在的正義の反応が減少することを明らかにしている。

Piagetによる研究以後、内在的正義の発達についていくつかの研究がなされている。研究の大半は、何か悪事を働いた子どもの例話を読み聞かせ、「子どもが悪事を働かなかつたら、不幸は起らなかったか?」というような質問を与えることによって、内在的正義の存在を検討している (Johnson, 1962; MacRae, 1954; Medinnus, 1959; Najarian-Savajian, 1966; 内藤, 1987)。悪いことをしなければ、不幸は起らなかったという考え方がなされた場合には、原

因と結果が結びついていると考えられるため、内在的正義の反応として考えられた、MacRae (1954) は、7歳から14歳までの子どもを対象として、内在的正義の信念が年齢と共に減少することを見出している。また、Medinus (1959), Jensen and Rytting (1974) は、物語によって内在的正義の反応に差が生じることを明らかにし、科学的な因果推論が可能な場面においては内在的正義の反応が減少することを明らかにした。

また、Kister and Patterson (1980) は、伝染病の概念と内在的正義の信念との関連を検討し、伝染病の概念的知識を理解している子どもは、悪事後に病気にかかった子どもの話に対して、内在的正義の信念に基づく説明をしないという結果を見出している。この他にいくつかの研究がなされているが (Carso, 1948; Dennis, 1943; Grinder, 1964), 7歳以下の子どもの大半が悪事と不幸の因果関係を推論するが、それより年長の子どものは、自然の摂理や科学的知識を理由とした返答をするようになり、内在的正義は減少することを明らかにしている。すなわち、子どもの内在的正義の反応は科学的に因果関係を推論する能力が獲得されていくことによって、し

だいに否定されていくことが示唆される。

しかし、内在的正義の信念が、科学的知識をもつことによって、完全に否定され、放棄されてしまうのか、それとも、科学的な説明が見出されない場合に内在的正義の信念が用いられるのか、すなわち、内在的正義の信念自体は年齢と共に消失するのではなく、潜在しているものであるのか、についてはいまだ明らかにされていない。現実には、大人においても因果応報の反応が聞かれたり（林、米沢、1982）、近年超自然的なものを信奉する若者が少なくないことを考えると、内在的正義は減少するよう見えるだけで、必ずしも消失するものではないように考えられる。

また、内在的正義の信念と同様に、「偶然」の概念の発達についても一致した発達過程が見出されていない。Piagetは、内在的正義の信念が年齢と共に減少することのほかに、年少の子どもが偶然の概念をほとんど理解していないことを示唆している。すなわち、子どもは原因の説明が不可能である偶発事態についても必死に理由を探しだそうとする傾向が強いが、物理的な法則が理解されるようになるにつれて、しだいに偶然性を理解するようになると考えた。しかし、Piaget自身は内在的正義と因果推論との関係を直接検討してはいなかった。また、Jenkins and Wand (1965)、Kahneman and Tversky (1973)は年少の頃は原因と結果が絶対に結びつくと考えていたのが、やがて、どうしても結びつかない場合もあると考えるようになり、その際に偶然という説明概念を用いるとしてPiagetの考えを支持している。

したがって、Piagetの流れを汲む研究から想定される因果推論は、内在的正義による推論(IC: immanent causality)と、不幸の原因に悪事と、自然的摂理の両方を同時に考えられない推論(AC: asyndetic causality)の2つを因果推論の未熟な段階とし、悪事と不幸の間に媒介過程を想定する推論(MC: mediated causality)と悪事と不幸を無関係と判断し、偶然を説明概念として用いる推論(CC: chance contiguity)を高次の因果推論の段階に属するといふものであり、偶然性の理解をもっとも成熟した反応として考えている。

他方、近年文章に関する情報処理理論領域においては、Piagetらにより解釈される内在的正義の反応を別の観点からとらえている(Rumelhart, 1975)。すなわち、この領域では年少においては、悪事と不幸という2つの事象間のうち、先の事象を原因として求める、時間の接近性(contiguity)による推論として、この反応をとらえている。それが、年齢とともに、しだいに、不幸の原因として考えられるもの

は何か、逆に、悪事によりもたらされるものは何か、という2方向の推論が可能になると仮定される。その際、不幸の原因として考えられる自然的摂理及び科学的知識が、悪事から必然的にもたらされるものとしてつながりをもつ場合に、媒介過程を考慮した推論がなされ(MC)、失敗した場合に(不幸の原因に悪事と媒介の両方を同時に考えられない推論)ACにとどまると考えられている。さらに、偶然性による推論(CC)は、Piagetの考えとは異なり、文脈の統合が失敗に終わるときに用いられるものと考え、発達の高次のものとしてはとらえられていない。

Karniol (1980)は、内在的正義の発達を、情報処理理論の立場から検討し、先に述べたIC, AC, MC, CCの4つのカテゴリーの枠組みで分析した。お金を盗んで逃げる途中、階段から落ちた子どもの話や、友だちに嘘をついた日に水溜まりでころぶなどの例話を聞かせ、なぜそのようなことになったのか、また、悪いことをしなければ災いは起こらなかったのか、といった質問を与えた。その結果、悪事と不幸の間に説明を媒介させるMCが増加すること、その際、年少児は自然法則を用いるものの割合が多いのに対し(石につまづいてころんだ)、年長児では心理的な説明を用いるものが多いことを見出した(悪いことをしたとくよくよしていたのでころんだ)。Karniolは、こうした発達傾向を内在的正義の信念の発達という文脈でとらえるよりは、むしろ因果推論の能力が向上するためであると解釈した。したがって、因果推論能力の発達によって悪事と不幸とを結びつけるという反応は消失すると考えた。

このように、Piagetに端を発する一連の研究においても、情報処理理論においても、ともに悪事と不幸を結び付ける反応は減少するという点で一致しているが、Piagetらはこの反応を道徳性に関わる子ども特有の信念としてとらえているのに対して、情報処理理論においては、これを因果推論能力の未発達さから生じるものとしてとらえており、大きく見解が異なっている。しかし、いずれの考えが正しいかについては、いまだ説得力のある研究が報告されていない。しかも、いずれの考え方によっても、大人にも悪事と不幸を結び付ける反応が見出されている実態を説明することができないといえる。

こうした問題は、対象となる各年齢群の人数が少なかったことも原因の一つとして考えられるが、文章中の悪事と不幸という2つの事象が結びつけられるかいなかによって、内在的正義の信念の発達を検討しようとしたところに限界があるように思われる。すなわち、因果推論の能力が発達することによって、表現上においてはたとえ内在的正義の反応が減少し

でも、必ずしも内在的正義の信念がなくなることを意味してはいないのではないかとと思われるのである。したがって、内在的正義の信念をもつかいなかを、従来のようにいくつかの簡単な例話によってのみ検討することでは、因果推論の能力の発達と混同され、子どものもつ内的世界を十分に明らかにすることができないと考えられる。

したがって、本研究では、因果推論の能力や表現能力の限界によって生じる「悪事—不幸」の説明と、真の内在的正義の信念によって導かれる反応とを区別し、内在的正義の信念の発達を明らかにすることを目的とする。その際、先行研究における先の問題点を解決するために、以下の4点が工夫された。すなわち、第1点は、低年齢児に対しては、従来の悪事と不幸を含めた例話を読み聞かせ、因果関係を聞き出す方法に加えて、補助図版を用いて選択形式の質問を併用した。第2点は、不幸と一口にいても、2種類あることが考えられ、自らが起こした不幸と天災による不幸の2つの場面を導入し、反応を比較した。すなわち、内在的正義の信念をもつものは、いずれの場合においてもその原因を悪事に帰属することが予測されるが、因果推論の能力が低いことによって悪事と不幸を結び付けるものは、天災による不幸の場合には自らが引き起こした不幸よりも、偶然による説明を行いやすい、と予測される。第3点は、内在的正義の信念をもつ場合には、感情的にかなり独自の不安や恐れに近い感情をもっていることが予測されることから、迷信やジンクス、さらには不安傾向などのパーソナリティ変数との関係を検討した。最後に、年齢群を横断的に幼児から大学生までを含めると同時に各年齢群の人数を増やすことによって、発達傾向をより明らかにできるようにした。

## 方 法

被験者：茨城県下における幼稚園児56名（男29名、女27名）、小学校2年生32名（男17名、女15名）、4年生32名（男17名、女15名）、6年生31名（男17名、女14名）、大学生100名（男48名、女52名）。計251名（男123名、女128名）。

調査用紙：幼稚園児用、小学校低学年用、小学校高学年用、大学生用の4種類が作成された。いずれも、①内在的正義に関する調査、②迷信、ジンクスに関する調査（小学生以上は不安尺度も実施された）が作成された。例話の内容、質問のしかた、選択肢の数が対象年齢によって、無理のないように配慮された。以下に、それぞれの内容が説明される。

### (1)幼稚園児対象

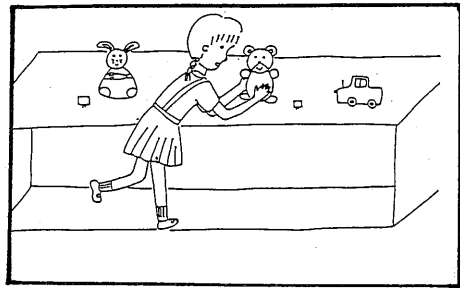


Fig. 1 盗みをはたらいた例話の補助図版の一例



Fig. 2 ころんだ理由を示す選択肢

質問内容の把握を徹底させるために質問、回答、選択に際して補助図版を用い、個人面接調査を実施した。回答選択肢、図版の呈示順序はランダムに変えられた。例話は、自らが引き起こした不幸（内的不幸：self-producible）と、天災による不幸（外的不幸：external-producible）の2種類が作成された。例話の主人公の性と被験児の性を一致させるために、男児用、女児用が作成された。それぞれの概要は以下の通りである（女児用）。

### 内的不幸の例話

おもちゃやさんで以前からほしかったおもちゃがあったので、ぬすみをはたらいたななちゃんが、家に帰る途中石につまづいて転び、けがをする（Fig. 1）。

### 外的不幸の例話

母親に部屋をかたづけられた遊びにいいと言われていたが、うそをついて遊びに出たかずちゃんが、遊んで家に帰る途中雨にふられ、風邪をひく。例話が話された後、それぞれ次のことが尋ねられた

（内的不幸の話）。

- ①今のお話はどのようなお話だった（例話を理解しているかどうかの確認）
- ②ななちゃんは、何か悪いことをしたかな（悪事の確認）。
- ③どうしてななちゃんは、ころんだのかな（選択形式：Fig. 2）。

ア．悪いことをしたから（内在的正義をもつ反

応：「悪事—不幸」反応)

イ. 見つからないようにあわてていたから (心理的要因に帰属：「心理—不幸」反応)

ウ. 道がでこぼこだったから (物理的要因に帰属：「物理—不幸」反応)

エ. その他

④ ななちゃんは、おもちゃをとらなかつたら、ころばなかつたかな。(内在的正義の反応の確認)。

⑤ それは、どうして。

⑥ 石はななちゃんが、おもちゃをとっていたことを知っていたかな (アニミズムの反応を見る)。

\* 怖いものに関する調査 (⑤, ⑥以外は選択式)

① 悪いことをすると誰かが見ていると思う。

② それは、誰だと思う。

③ 「ばちがあたる」って聞いたことがある。

④ 誰から聞いた。

⑤ 何か怖いものがある。

⑥ 今までに恐かった時があった。

\* 迷信・ジンクスに関する調査 (はい、いいえで回答させた)

⑦ 「嘘をつくとえんまさまに舌をぬかれる」と思う。

⑧ 「おへそを出して寝ると、かみなりさまに取られる」と思う。

⑨ 「火遊びをすると、おねしょする」と思う。

⑩ ゆうれいやおばけがいると思う。

(2) 小学校2年生対象

例話は幼稚園児と同様であるが、面接形式ではなく、集団用の調査形式で作成された。図版も調査内容に挿入された。ただし、理由を聞く質問の選択回答は、「どうしてそうなったかわからない」と「たまたまそうなった」(偶然的要因に帰属)が付加され、6つに増やされた。

\* 迷信・ジンクスに関する調査

ばちがあたるということを知ったことがあるか、また、だれからきいたかという質問の後に、迷信とジンクスに関する以下の項目が尋ねられた。すなわち、①よるくちぶえをふくと、へびがでる、②うそをつくるとえんまさまに舌をぬかれる、などの迷信に関する8項目と、①うらないはあたると思いますか、②たたりというものがあると思いますか、などのジンクスに関する8項目の計16項目から構成された。それぞれについて、どれくらい気になるかを、「とても思う」から「ぜんぜん思わない」の4段階評定によって評定させた。

\* 不安尺度

「不安傾向診断検査 (GAT)」の中から自罰傾向、

過敏傾向、恐怖傾向についての項目30項目とライスケール3項目、計33項目から構成された。

(3) 小学校4, 6年生対象

小学校2年生に対して用いた例話に、隣の家の柿の木に勝手に登り、柿を取ろうとして、木から落ちた太郎君の話 (内的不幸) と、かけっこで隣を走っていた子をわざと転ばせて一番になった花子さんが、障害物競争で跳箱が壊れ、足をけがした話 (外的不幸) をさらに付け加えた。他の質問事項は、小学校2年生と同様であった。

(4) 大学生対象

内的不幸の例話として、木にのぼって落ちてけがをした太郎の話 (小学校4, 6年用共通) と、万引をした帰りに石につまづいて転んだAさんの話が用いられた。外的不幸の例話には、オリエンテーリングでずるいことをした花子が、ゴールまぎわで木橋が壊れてけがをする話と、K君が体操部の練習をさぼって試合に参加したところ、鉄棒の演技中にワイヤーが切れて落下し、けがをする話が用いられた。

理由の選択肢は、小学生用に、「道の状態が悪いこともあったし、ばちもあった (内在的正義+物理的要因)」と「あわてていたこともあるし、道の状態も悪かった (心理的理由+物理的理由)」と「あわてていたこともあるし、ばちもあった (心理的理由+内在的正義)」の3項目を加えた。

\* 迷信・ジンクスに関する調査

迷信に関する項目は、「夜爪を切ると親の死に目に会えない」など7問、ジンクスに関する項目は、「血液型占いはあたると思いますか」など10問、を4段階評定によって評定させた。

\* 不安に関する調査

GATが小学生対象の調査であるため、内容を変えない形で一部修正して用いた。

## 結果と考察

Table 1に、各年齢群の理由づけ反応が示されている。混合反応を含めない「悪事—不幸」反応、「物理—不幸」反応、「心理—不幸」反応とそれ以外の反応の4つにカテゴリー化して、年齢差を検討した。その結果、1%水準で有意な差が認められた ( $x^2=249.34$ ,  $df=12$ )。すなわち、「悪事—不幸」反応は、小学校4年生において全体の40%以上を占め、もっとも高い割合を示した。しかし、その他の年齢群では、10%台から20%台の割合で示されており、Piaget理論や情報処理理論で仮定されるような、年齢とともに単調減少する傾向は認められなかった。すなわち、情報処理理論で仮定されるような、因果

Table 1 年齢群別の理由づけ反応

理由づけ反応	幼稚園	小 2	小 4	小 6	大学生	
「悪事—不幸」反応	28 (26%)	17 (28%)	52 (43%)	23 (19%)	98 (26%)	
内訳	純粹の「悪事—不幸」反応	28 (26%)	17 (28%)	50 (41%)	23 (19%)	38 (10%)
	「悪事—物理—不幸」反応	0 (0%)	0 (0%)	1 (1%)	0 (0%)	24 (6%)
	「悪事—心理—不幸」反応	0 (0%)	0 (0%)	1 (1%)	0 (0%)	36 (9%)
「物理—不幸」反応	45 (41%)	5 (8%)	2 (2%)	3 (3%)	68 (18%)	
「心理—不幸」反応	33 (30%)	30 (50%)	64 (52%)	71 (60%)	72 (19%)	
「物理+心理—不幸」反応	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	80 (21%)	
「偶然」反応	0 (0%)	0 (0%)	1 (1%)	18 (15%)	51 (13%)	
わからない	0 (0%)	1 (2%)	1 (1%)	2 (2%)	0 (0%)	
その他	3 (3%)	7 (12%)	2 (2%)	2 (2%)	11 (3%)	
	109	60	122	119	380	

数値は全例話における延べ数

推論能力の向上とともに、「悪事—不幸」反応が減少するという予測も、Piagetらの理論による科学的知識の獲得から、内在的正義の反応が減少するという考えのいずれをも支持しない結果が示された。

このように本研究で見出された「悪事—不幸」反応が、真の内在的正義の信念によって生じるものかいなかを検討するために、まず、不安傾向と迷信、ジンクスなどの信じやすさとの関係が検討された。すなわち、「悪事—不幸」反応が真の内在的正義の信念から導かれるものであれば、不安傾向が高く、迷信やジンクスに関しても信じる割合が高いものにこの反応が多く見られることが仮定された。

したがって、各調査得点を年齢群別に、中央値折半し、高群と低群に分け理由づけ反応との関係を検討した。大学生については、「悪事—物理—不幸」反応、「悪事—心理—不幸」反応などの混合反応と偶然に帰属した反応もカテゴリーとして加えて検討された。その結果、不安傾向との関係はいずれの年齢群においても有意な差は認められなかったが、迷信、ジンクスの信じやすさとの関係が大学生においてのみ認められた（迷信： $\chi^2=12.76$ ,  $df=5$ ,  $p<.05$  ジンクス： $\chi^2=22.02$ ,  $df=5$ ,  $p<.01$ ）。すなわ

ち、Fig. 3とFig. 4に示されるとおり、大学生においては、迷信やジンクスを信じやすいものにも、「悪事—不幸」反応が多く見られ、偶然に帰属するものの割合が低いことが明らかとなった。

大学生以下においては、統計的には有意ではなかったが、「悪事—不幸」反応の人数の割合はいずれも、迷信やジンクスを信じやすいものに多かった。大学生についてしか明らかな傾向が見られなかった

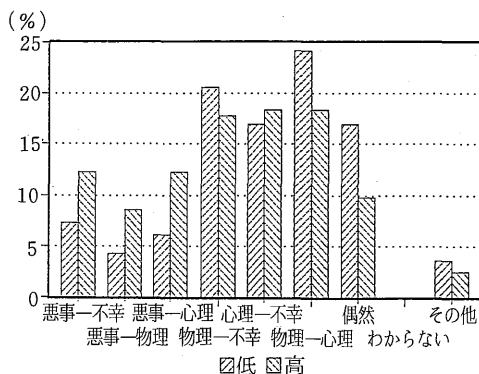


Fig. 3 迷信の信じやすさと理由づけ反応 (大学生)

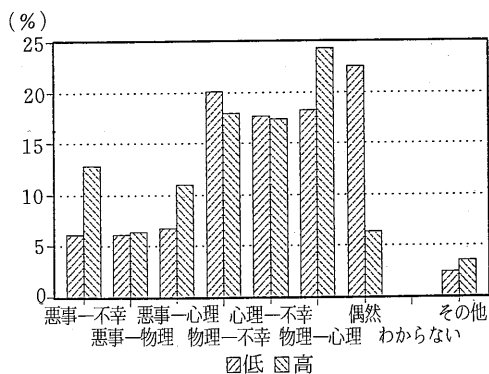


Fig. 4 ジンクスの信じやすさと理由づけ反応 (大学生)

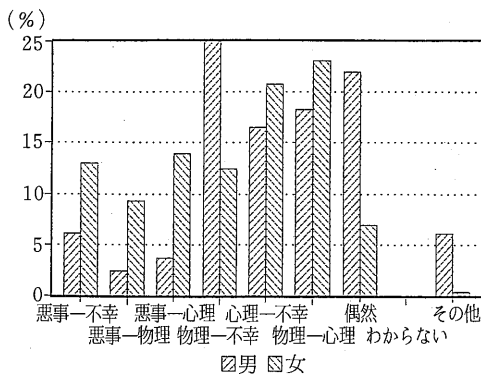


Fig. 5 理由づけ反応における性差 (大学生)

理由として、日常経験の豊富さと、迷信やジンクスについての知識、理解度についての問題が考えられる。すなわち、うしろめたいことをしてひどい罰を受けた経験の多さなどが、迷信やジンクスに関する知識と重なって、さらに強い信念として残ることが予測される。それが、しだいに迷信やジンクスを信じやすいパーソナリティとして比較的時間的に安定したものになるように思われる。その結果、科学的知識による説明を頭では理解していても、内在的正義の信念を払拭することが難しくなると思われる。しかし、この点については、中学生、高校生を対象に含めて検討することによって、より明らかな関係が見出されるものであり、ここでは推測にとどめるべきであろう。

つぎに、「石につまづく」、「木から落ちる」などの内的不幸と、「雨が降る」、「跳箱が壊れる」などの外的不幸との例話の種類と理由づけ反応の関係が検討された。その結果、小学6年生と大学生について有意な差が認められた(小学6年生： $x^2=12.09$ ,  $df=2$ ,  $p<.01$ , 大学生： $x^2=77.59$ ,  $df=5$ ,  $p<.01$ )。小学校6年生においては、外的不幸に「悪事—不幸」反応、「偶然」反応の割合が高く、内的不幸に「心理—不幸」反応が多く認められた。大学生においては、「悪事—不幸」反応に差の無いものの、「偶然」反応、「心理—不幸」反応については同様の結果が見出された。さらに、外的不幸に「物理—不幸」反応が多く見られたのが特徴的であった。

本研究では「悪事—不幸」反応が、真の内在的正義の信念によるものならば、例話によって「悪事—不幸」反応に差が認められないことが予測された。その結果、6年生において差のあるものの、その他の年齢群においては有意な差は認められなかった。したがって、本研究で認められた「悪事—不幸」反応

は、おおよそ内在的正義の信念によってもたらされたものと考えられる。

以上のような結果を総括すると、本研究ではPiagetらの理論や情報処理論から予測されるような「悪事—不幸」反応の年齢による減少傾向は認められなかった。すなわち、全体の理由づけにおける割合は必ずしも高くないものの、大学生においても依然として存在することが明らかとなった。特に、大学生においては迷信やジンクスに関する信じやすさとの関係が見られ、内在的正義の信念が存在する原因のひとつとしてパーソナリティ変数との関係を今後検討していく必要性のあることが示唆された。また、理由が心理的要因に帰属されやすい内的不幸と、物理的要因や偶然に帰属されやすい外的不幸との間に、「悪事—不幸」反応の差がほとんどの年齢群で認められなかったことから、真の内在的正義の信念により導かれた反応として考えてよいことが示唆される。

本研究では、性差については特に仮定していなかったが、大学生においてかなり顕著な差が認められた( $x^2=47.4$ ,  $df=5$ ,  $p<.01$ )。Fig. 5に示されるとおり、女性に「悪事—不幸」反応、「心理—不幸」反応の割合が高く、男性に「物理—不幸」反応、偶然反応の割合が高い傾向が明らかとなった。Piagetの理論からすれば、「悪事—不幸」反応が多いことは、発達の未熟であると考えられ、偶然に帰属することは高次の段階として考えられる。すなわち、本研究結果は、女性が発達の未熟な反応をし、男性が高次の段階の反応を示したと考えられる。しかし、本研究結果がPiagetの見解を支持する結果を得ていないことから、単純にそう言い切れるものではないことが示唆される。

男性に偶然や物理的要因に帰属する傾向が高いの

は、外界の情報を第3者の立場から客観的に把握し、事象と事象の関係を自分と切り離して冷静に解釈するためであると予測される。これに対し、女性に「悪事—不幸」反応と心理的要因に帰属する傾向が高いのは、外界の情報を自己と切り離して考えるのではなく、常に関連づけて解釈する傾向が強いのではないだろうか。また、外界の事象に自己の感情を移入する傾向が男性よりも強く、情緒的な側面を強く反応として表すように思われる。したがって、男性と女性では事象のとらえ方、とらえる視点がかなり異なってくることが示唆され、発達のな高次と低次を一概に示すものではないように考えられる。

本研究では、対象をひろげかなり広範な発達の傾向を検討したが、各年齢群における微妙な反応の相違や、他の要因との関係を言及するには及ばなかった。したがって、今後は、各年齢群における、内在的正義の信念とそれを形成する要因について、さらにきめ細かな研究を重ねることが望まれる。

### 引用文献

- Dennis, W. 1943 Animism and related tendencies in Hopi children. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **38**, 21-36.
- Grinder, R.E. 1964 Relations between behavioral and cognitive dimensions of conscience in middle childhood. *Child Development*, **35**, 881-891.
- 林知己夫・米沢弘 1982 日本人の深層意識 日本放送出版会
- Jensen, L., & Rytting, M. 1974 Effects of information and relatedness on childrens belief in immanent justice. *Developmental Psychology*, **7**, 93-97.
- Jenkins, H.M., & Ward, W.C. 1965 Judgement of contingency between responses and outcomes. *Psychological Monographs*, **79**, 594.
- Johnson, R.C. 1962 A study of children's moral judgements. *Child Development*, **33**, 327-354.
- Kahneman, D., & Tversky, A. 1973 On the psychology of prediction. *Psychological Review*, **80**, 237-251.
- Karniol, R. 1980 A conceptual analysis of immanent justice responses in children. *Child Development*, **51**, 118-130.
- Kister, M.C., & Patterson, C.J. 1980 Children's conceptions of the causes of ill-understanding of contagion and of immanent justice. *Child Development*, **51**, 839-846.
- MacRae, D. 1954 A test of Piaget's theory of moral judgement. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **49**, 14-18.
- Medinnus, G.R. 1959 Immanent justice in children: a review of the literature and additional data. *Journal of Genetic Psychology*, **94**, 253-262.
- 内藤俊史 1987 こどもの内在的正義の観念としての態度との関係—農村地域におけるケーススタディ 社会心理学研究 3(1), 29-38.
- Najarian-Svajian, P.H. 1966 The idea of immanent justice among Lebanese children and adults. *Journal of Genetic Psychology*, **109**, 57-66.
- Piaget, J. The moral judgement of the child. Routledge and Kegan Paul: London.
- Rumelhart, D.E. 1975 Notes on a schema for stories. In D.L. Bobrow & A. Collins (Eds.), Representation and understanding: studies in cognitive science. New York: Academic Press.